

ほのぼの

第57号

令和3年

3月

発行

信行寺門信徒会

神戸市須磨区戎町1-2-3

TEL.078-732-5209



愚痴が出る

住職

好きな時に好きなことができるかと私たちは思い込む。それは違います。社会状況の変化や自分自身の心身状態の変化によって様子は一変します。コロナ騒動でステイホームの社会状況になって、これまで普通にできていたことが規制や自粛でできにくくなっています。予想もしなかったことです。

老いた親の病気療養のため、自分の近くの病院に入院してもらった人がいます。家から近い病院だとしょっちゅう面会にいけると考えてのことでした。しかし、コロナ騒動で思ったようにできていません。このように自由に面会できない人は珍しくありません。

できる時にできる事をしていないと後悔します。明日にしよう、今度にしよう、だから延ばしている間に時期を逃して「しまったもっと早くす

ればよかった」と思う。いつもの事がいつものように出来たり、いつもの人いつものように会えたりできれば、これほど有難いことはないのに、「当たり前」と思ってしまう。思い上がりです。「昨日もそうだった、今日もそうだ、明日もそうなるに違いない」という思い込みで過ごす、生活習慣になってきます。この「慣れ」は、私たちに「当たり前」の感覚をいだかせてしまい、大切なことを見落とさせてしまう。これでもいいのだろうかの問いもなくなり、有難うという感謝の心も、足元を観る心もなかなか出にくいものにしてしまいがちです。逆に出るのは愚痴です。どうして思うようにできないのかのイライラです。

この世の生老病死などの四苦八苦は、誰も避けることができません。老いも若きも男も女も、金持ちも、有名人も関係ありません。だれも逃げきれません。それなのに私たちはその事実が自分の上に降りかからないと、気付けません。他人ごとにしてしまう。

私たちは社会の一員として、心と身体を持って生きています。社会も、心も身体も、思うようになりません。心身が思うようにならぬことを特に老いと病と死の上で実感します。老いると、物忘れがとてどもひどく

なります。痴ほう症になる事もあります。世話をしている人からすると、ついイライラして大声を出してしまう。愚痴がでます。そうすると世話をする側の人、される側の人も、悲しいだけです。「あんなにきつく言わなければよかった」と後悔の声と愚痴が聞こえます。聞こえても人間にはどうにもならない世界です。ただ聞かせてもらっただけです。老いると、身体も思うように動かせないようになります。足や腰が痛くてたまらない。歩けない、転びやすくなる。そうなる、こんな痛くてつらいのなら、死んだほうがましだ、死にたい」という気持ちが起こり、それを口に出す。言う方も聞く方もつらいことです。愚痴が出ます。

この人間生活の実態から目をそらさないようにしましょう。生活しておりますと生活ごみがでます。愚痴は生活ごみです。南無阿弥陀仏の法海に流すのが一番です。欲を出し愚痴る生活を通してお念仏させてもらいましょう。阿弥陀さまがすべてを引き受けて支えておられます。自分で自分のことが全部できると思う人は自分で一人になっていないでしょうか。



ご本山念仏奉仕団に参加して

柏原 純子

信行寺さまと私との仏縁は、平成二十九年に往生した主人の納骨をさせていただいてからになります。

今回、第三十六回信行寺念仏奉仕団の一員として参加しました。お声をかけていただき、初めて参加してから三回目になります。コロナ禍ですので、内容が例年より縮小され、半日だけの奉仕作業となりました。今回の参加団体は三団体、五十二名で、信行寺からは九名参加しました。飛雲閣のある滴翠園のお掃除をした後、ご門主様などのお話があり、御影堂の階段にて記念撮影をしました。阿弥陀堂は改修中でした。

翌日には、御影堂にて晨朝勤行に参加しました。朝の寒くて暗い中、広い堂内に読経の声が心地よく響きわたって



いました。堂内から出ると一斉に朝日が照り輝き、朝の感動に包まれました。

永観堂の見返り阿弥陀如来を拝観したり、親鸞聖人が九歳で得度された青蓮院門跡を訪ね、幼い親鸞聖人を偲んだりしました。

西本願寺の方の温かなお迎えや阿弥陀さまのお教えに触れるひと時、そして念仏奉仕団の仲間の皆さんと共に過ごした二日間はとても有意義な時間でした。ありがとうございました。



念仏奉仕団十回表彰を受けて

空 早苗

仕事で神戸を離れ、信行寺さまとはご無沙汰していましたが退職後再びご縁を頂きました。

坊守さんから奉仕団参加のお誘いを受け早十年になります。色々なことがありましたが、健康で毎年参加させて頂

き有難いことです。最初の参加のときには、段取りがわからず皆さんの後についていくのが精一杯でした。百華園（ご門主さまの私邸のお庭）、飛雲閣のお庭の掃除、御影堂の拭き掃除などを各地から上山された方々と和気あいあいと奉仕をさせて頂きます。鴻の間でお抹茶接待を頂き、白書院の見学など国宝の建物の中にいることの贅沢を味わわせて頂きます。また、前門主さま、前坊守さま、現門主さまとのご面接、記念写真は貴重な体験です。

最初に参加したときは参加者が十六名でしたが、だんだん減って、今回は九名になってしまいました。例年、奉仕団の日程は一泊二日です。宿泊先では皆さんと親睦をかさね、楽しいひとときを過ごします。

今年も昨年（令和二年十月二十六日）に続き、半日だけの奉



仕になるかもしれませんが、是非ご参加ください。今回、十回の表彰して頂き、次の十五回の表彰まで健康に気をつけて頑張る意欲ができました。信行寺のご同朋の皆さんよろしく願います。

新年初法座

令和三年一月五日、新年初法座を勤めました。最初に、本堂で正信偈のお勤めをし、その後、住職による法話がありました。最後に、礼拝堂で副住職の馬頭琴と木下さんのピアノによる演奏がありました。恩徳讚など皆さんで合唱し、楽しいひと時を過ごすことができました。コロナ禍でありますので、例年は持ち寄った食事を皆さんと一緒に頂いてきましたが、今年は食事なしとしました。いつものことが有難いことであると身に染みる毎日であります。



赤坂さんへの感謝

中川 さなみ

昨年十一月、赤坂亥才男さんがお浄土に往生されました。何度も大病を患われましたが、その都度回復され、気が付いたら法座の日には最前列に姿があり、ホツとしていました。今回も又お会いできると思っていました。お別れとなってしまうました。残念でたまりません。

赤坂さんは、阪神大震災でお寺が全焼して大変な時、信行寺の方々、門信徒会の方々と一緒に再建に尽力されました。住職の講座を一日も早く復活し学びたいとの強い希望

があり、中断していた信行寺壮年会

(教行信証講座)のお世話役を引き受けられました。多数の方々が遠方からも法座に参加され、今でも夜の仏教講座として続いています。

お寺の行事の思い出は、ご旧跡参拝旅行、西大谷納骨参拝とたくさんあり

ますが、特に忘れられない思い出は、ご本山念仏奉仕団です。数年前、奥様とスタートは別々でしたが、ご夫婦同時に二十回の表彰をされたのが忘れられません。強い絆を感じました。

門信徒会の役員として、親鸞聖人護法会、仏教講座、定例聞法の集い、すべてにおいて力となり私達を導いてくださいました。静かに、黙々と法要、法座の段取りを行ってくださいました。それを「あたりまえ」のように頼っていた私達。早速、今年の初法座の時、段取り不足で慌ててしまうことがあり、みんなで反省しました。

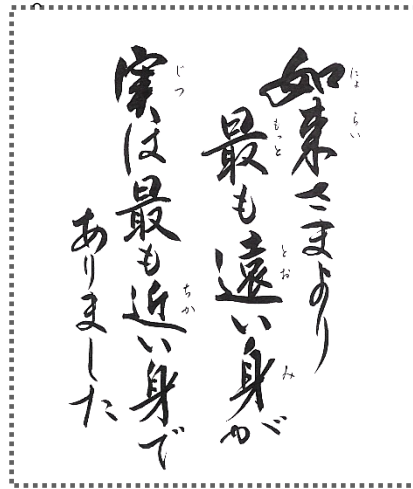
これからは赤坂さんの行動を受け継いで、滞りなくお寺のお手伝いをしていきたいと思います。

赤坂さん、長い間お世話になりました。おかげさまでありがとうございます。



法語カレシダリ

今年度の挿絵は、片岡鶴太郎さんが描いたものです。俳優でもあります。多才で独特な色遣いの絵を描いています。



さて、今回は四月の法語を紹介します。和氣良晴さんのこの言葉です。

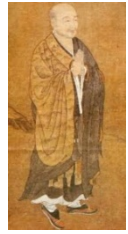
毎日、一切は過ぎていきます。家族がいてもいなくても、友達がいてもいなくても、毎日生活して今日もこうして二度と戻らない一日を失ってしまった。そんな虚しさを感じることはないでしょうか。現実を力いっぱい生

きているのに、ただいたずらに時間ばかりが過ぎ去っていく虚しさと言ってもいいかもしれませぬ。

無量寿経では、偉大な大弟子たちが集まった中に、たった一人阿難だけが未だ悟りを開けず、迷いの中にあつたという話が語られます。その阿難が、お釈迦さまに、「あなたは仏と仏がお互いに念じ合う世界にいるのではないか」とたずね、その問いがお釈迦さまに私たちが求めてやまなかつた本当の願いを説かせることになるのです。ただ一人迷いの中にあつた阿難によってこのお経が始まるのです。

そして、阿弥陀如来の本願が説かれていくのですが、その願いは私ただ一人を救うためであつたと親鸞聖人は言われています。なぜ私一人かといえば、私が最も如来から遠い存在だからです。

私の中には何もなかったと、醜いごみの塊であつたと知らされた時、ストンと阿弥陀仏の胸の中に落ちていくのです。なんと如来さまより最も遠い身が、実は最も近い身であつたのです。



副住職

正信偈のお勤めに親しまれている方は、善導独明仏正意の一句を改めて調声するので、七高僧の中でも特に善導というお名前を覚えておられるのではないでしょうか。

善導大師は六一三年、中国の山東省に誕生され、幼少の頃出家して諸宗を学ばれましたが、浄土変相図（観経曼荼羅）を見て浄土の教えに帰依されたと伝われます。そして二十六歳の頃、玄中寺に居られた道綽禪師を訪ねてお弟子になりました。それから七年間、道綽禪師が往生されるまで玄中寺にとどまり、他力念仏の教えを学ばれました。

善導大師の名著は観無量寿経の註釈書「観経疏」です。それまでの自力聖道門の人たちの念仏に対する考えを改めさせるため、この書が諸仏の大悲の願のころにかなうならば夢の中でそのことを証明してほしい、と願を立てました。すると夢で浄土をつぶさに見られ、そこに現れた一人の僧より観経の教えの要をさすけられたといひます。「観経疏」の最後にこれら夢の体験を語られたのは、後の世の

有縁の人に阿弥陀仏の浄土に対する信が生じてほしいという利他のころからでした。ですから、普通の人間が註釈した参考書のように考えてはならず、仏の真実の言葉である経典と同じようにあつかうことが大切なのです。

善導大師独りが観経に説かれている阿弥陀仏の本願のお心を明らかにされました、と正信偈にありますように観経に説かれた真意を私たちに伝えてくださいました。観経に登場する韋提希夫人は凡夫である私たちの代表であり、釈尊が説かれた阿弥陀仏の浄土に往生するという教えは、凡夫である私が阿弥陀様の本願力によって往生できるということを明らかにされたのでした。

信行寺の本堂には二河白道の絵があります。「観経疏」にでてくる譬えですが、人間の欲を現す水の河と、その欲を邪魔されて腹が立つ瞋恚のころを現す火の河にはさまれて、幅わずか五寸ばかりの細い白い道がお浄土からこちらに向かっています。それは煩惱まみれの人間生活に振り回される私の前に至りきている念仏の道です。「その道を行けよ」と釈尊の声を背後に聞き、また前方より「ただちに來たれ、必ず救うぞ」と阿弥陀様の呼び声を聞くのです。その仏様の呼び声にただ従うばかりです。

信行寺行事予定とご案内



春の彼岸法要

三月二十七日(土) 住職
二十八日(日) 副住職
両日とも午後二時より

第二十回 門信徒会総会

四月二十四日(土) 午後二時より
おつとめ・総会・法話
*状況にもよりますが、今年度は実施する方向でおります。参加をお待ちしております。

花まつり

今年度もなかなか大人数で触れ合うことが難しいため、中止とさせていただきます。

編集委員より

新春初法座で副住職さんの馬頭琴の伴奏をさせていただきました。副住職さんが、ホーミー(一人で二つの声を同時に出して歌うモンゴルの唱法)と共に即興で演奏された馬頭琴の音色がとても心に残りました。馬頭琴はたった二弦で音を出す楽器ですが、モンゴルの草原を吹き渡る風の音にも聞こえる素朴で且つ雄大な音から切ないメロディまでいろいろな音が出せます。モンゴルの何もない草原の中で馬の毛で弓や弦を作る素朴な馬頭琴は、二千年以上も昔からモンゴルの人々に演奏されてきました。そして、二つの弦で奏でられるメロディは西洋の(ドレミファソラシド)の七音とその間の音でつくられるモノとは違います。日本の民謡や演歌のように、五音階でできているようです。その限られた音で演奏される曲は、日本、アジア独特で我々の心に響きます。コロナ禍で不安な中、いろいろと我慢を強いられ不自由な我々ですが、この馬頭琴のように限られた音の中でも素晴らしい音を奏でつつ、「足るを知る」そんな気持ちをもって日々暮らしていけたらと思います。

木下 雅恵

